

国立歴史民俗博物館・新展示室の江戸橋広小路模型。歴史展示では、研究成果を盛り込みながら模型が製作される。リニューアル前の模型は町並みだけであったが、当時の絵画を基にしてさまざまな職業の人々を人形として配し、江戸の暮らしぶりを表現した。

特集

# 博物館と研究

## 平田光司

総研大ジャーナル編集長

本特集では研究機関としての博物館を取り上げる。博物館には収集、保管、調査、研究、展示、教育という6つの機能がある。総研大の基盤機関には人間文化研究機構国立民族学博物館（民博）、同国立歴史民俗博物館（歴博）という2大国立博物館があるが、これに国立科学博物館（科博）を加えた3館は、他にはない規模の研究者集団を擁している。上記の6つの機能のうち、研究に重点をおいた「研究型博物館」「研究博物館」、さらに「博物館型研究機関」とも言えるだろう。総研大ではこの研究機能を活かして、地域文化学専攻、比較文化学専攻（以上民博）、日本歴史研究専攻（歴博）の3専攻をおいている。

文化人類学、歴史学、民俗学、考古学の研究において博

物館の資料がもつ重要性は周知のことであろう。ところが、資料を公開、展示するにあたっては研究の過程や成果が大きく反映されていることは、一般にあまり知られていない。博物館における研究についての認識は残念ながら日本において、また、総研大においてさえ、まだ低いと思われる。

しかしながら、博物館はつねに研究成果を社会に向けて発信しつづけてきた。昨今、研究機関が社会に対して直接、情報を提供するアウトリーチ活動が盛んになってきているが、博物館は長い歴史をもつアウトリーチの場であり、その意味では、他の研究機関が学ぶべきことも多いだろう。

この特集では、博物館学の現在と将来を考えるため、まず民博、歴博、科博を代表する研究者たちに、博物館における研究とはどのようなものかを語ってもらった。次いで、博物館展示の課題とその解決への試み、博物館活動における国際交流についての論考・報告を紹介した。